

山川に落葉の散りもあへず流るゝを見て。

山川の岩うつ波の早ければ風のかけたるしがらみぞなき
落來る瀧の岩にせかれ、水の白玉ながら花のおもかげぞ
せし。此瀧の名を里人にとへど、しらぬよしをいふ。中々
をかしくて。

落瀧岩うつ水のしら浪はいひしらぬ花の名にやしらん
山路より右に海と見たさるゝ雨雲、海よりおこりて墨を
すりながしたるやうなり。

五日。能生を出づ。左は高巖苔むして目も遙にそびえ、右
は浦浪駒の蹄をひたす眞砂地也。殊に親しらすなどいふ所
は、波うちて歸るひまゝ、からうじて馳過る所也。海上
なきたる時も、やうゝに駒をならぶるに所せばきばかり
也。けふはおぼろげなりといへど、猶岩に打かけたり。馬
にて馳す。

聞てだに辛くも有かな垂乳根の親不知とは誰かいひけむ
かゝる所を、とかくして越中の國、境の浦につく。此所よ
りぞ御領なりければ、旅宿もいといたうやすく覺えて、夢
もむすぶべくに、隣國越後の頸城郡へ、此比有馬左衛門佐永

總朝臣、もとは日向の國の縣の領主たりしが、政務やから

かりけむ、民そむき物騒なりし故上意よろしからず、此處
へ移住の事におよべり。されば彼の郎從等、はるゝの海
陸を経てうつり來る有様、或は老たるもあり、いとけなき
もあり。心の中おもひやられぬ。さるにつけても今更に、
君恩の高きをおもふにこそ。

代々を経て君がしめたる國つ風こと里人やさぞ慕ふらん
六日。境を出て入膳につく。晝つかたかしこを出で行くに、
よく晴れたり。左のかたは山いくへともかさなり、日かけ
うらゝにてうちけぶりたり。右は海上遙に見わたされて、
浪いと静也。西の方、能登の嶋も見え出たりけり。

打烟り雲かとぞまがふ越の海の波間にみゆる能登の島山
舟木とるなどよめれば、おもひ出でてをかし。左の山の端
かさなりけるそのかひより、雪いと白く見ゆるは、立山な
るべしとおぼえて、里人にとへばしかりといふ。雪はいつ
ふりぬと問へば、文月の廿日比ふりぬといふ。行く路に立
つゞきたる梢どもの、紅ふかきに雪猶しろうみえたりつる
さま、いひしらすに。

たち山や染むるこすゑに移り來て又たぐひなき峯の白雪
黒部川などうちわたり行けば、前嶺にかくれて見えす成り
ぬ。

行きゆけば重なる峯にかくろへて面かげにたつ山の白雪
七日。時々しぐれきて、又日影もほのめけり。今日は魚津
を半夜に出て、日高く高岡に着く。

八日。高岡を出でて石動といふ所にいたり、此驛を過ぐれ
ばやがて埴生の里なり。雨の後霜葉ことに興ある中に、八
幡の宮居立たまひけるを見て。

秋は猶色もちしほに染め盡くすもみぢをぬさの朱の玉垣
くれかけてくりからの山路をわく。紅葉いとおほく、とき
は木ども立ちまじりて、青地の錦を見る心地す。

時こそあれさらぬ常磐の梢さへ夕べ榮えある山の紅葉々
明朝とく御入城あるべしとて、此暮津幡に御止宿有けり。明
曉あらかじめ登城すべきにより、今夜つばたを過ぎて鞭う
ち、亥の時ばかり金澤茅屋にかへり着きぬ。先づ燭をもて
庭などを見るに、わら屋の軒いたくかたぶき、落葉隙なき
ほどふりしきたり。

軒端のみあれし宿かは故郷のにはの梢にあらし吹くころ
過ぎにし春、見すて、旅立侍りし櫻木も、紅葉に色かへ、
おもかはりせしこゝちぞする。

みし春の花も紅葉にいろかへておのが宿りをたどる古郷
又の日出仕のいとまとはかり詠めたるに、軒の板間苔むし
落葉散りかゝりたるを見て。

眞柴屋にたれ葺ゆふと思ふまで軒の板間に散る木の葉哉
一、有澤致貞が雷斧の説

有澤惣藏家に所珍襲の雷斧あり。惣藏記之曰。雷斧は雷
神の偶所作者也。其遺落するもの人間得之。予得る所の者
は、往年能州羽咋郡阿岸村の山中に拾ふ所也。土人は只怪
石と號して愛するのみ、雷斧成るを不知。予初見之、形如
斧にして似石不重、似金不剛、斑文ありて土瓦に類す。博
物の人雷斧不可疑といふ。天造化の妙雖不可思議、深く
思へば斧鉞等の農器は、神農の聖作といへども是人の所作
也。雷は天地と俱に有て天の神作也。造化の至妙必ずしも
雷斧のみに不限、人物皆天の神作也。只難得ものを以て珍
とするは人の常情也。然れば深貴藏之も不亦宜乎。今中